

シベリア抑留の思い出

岐阜県 早川芳美

昭和二十(一九四五)年八月十七日夜、奉天(現瀋陽)に集結のため新立屯を汽車に乗り立つ。大虎山駅を過ぎたころから、機関士がソ連軍との接触を恐れたのか遅々として進まなくなる。ようやく十九日、新民駅までたどり着く。

右手がプラットホーム、左側は緩やかな十メートルぐらいの土手で、無蓋車に乗っていた我々には平原の遙か彼方まで見渡すことができる。

突然、豆粒ぐらいの黒点が地平線の彼方に見える始め、だんだん大きくなってきた。ソ連軍の巨大な戦車の集団だ。列車を取り囲み、空には復葉の飛行機が舞い始める。(拙書を読まれた長野の長谷川さんのご指摘では「アントーフの重爆が、不気味な黒い翼に毒々しい星のマークをつけて、

ロースピードで通過した記憶だ」とお便りをいただきました。私の脳裏の黄色の復葉機のイメージは、どこで記憶されたのか不思議だ。

「弾込め、戦闘準備」誰の声か狂気のような命令が下ると同時に、「撃ってはいかん、戦争は終わった、撃ってはいかん」、日ごろ温厚な滝本部隊長の怒号が響き、皆我に返った。同時にソ連将校がピストルを空に向け発砲しながら駆け登って来た。

早速ロシア語のできる伊藤少尉の通訳で、部隊長との間で武装解除の交渉がまとまり、全員プラットホームに整列、屈辱の両手を挙げソ連兵の身体検査を受ける。時計、万年筆等はこのとき全部取られてしまった。貨車に残した荷物は武器を含め全部、反対側からはい上がってきた住民に略奪されてしまった。

検査後、プラットホームに座って写真を撮られたが(記憶にない)、ゴルバチョフ大統領の来日の時、日本に引き渡された死者名簿とともに渡さ

れた未公開の写真の中に、滝本部隊長、榊原軍医大尉を前に若干の氏名が確認できる人を除き、その他大勢の中に私も含まれていると思ひ當時を偲ぶ貴重な写真、平成二（一九九〇）年十二月発行に掲載されている「週間読売」を購入、大切に保管している。

なんとしても滝本部隊長の「撃つな」の一声がなかったら、現在の自分が生きているか疑問に思う。平成に入ってから九十歳で亡くなられた。謹んでお祈りするとともにお礼を申し上げます。

新民の捕虜生活

街の中に連行され、広場を平屋建てが周囲を囲む一郭に収容される。その後二百人ほどの部隊と、百人程度の日本人の集団も入所、総勢五百人余りに増える。何の作業もなく毎日コウリヤンの食事を食べ、無為に日を過ごすうちに私は胃を壊し、激しい下痢のために衰弱する。そのために島田班長が戦友の網野に「早川は駄目かもしれん、

非常食の米でお粥を炊いて食わせろ」と、後日網野からそのことを聞き、その情に謝す。（あの状況下でどうして米を都合したのか聞くのを忘れてる）

夜突然、婦女子の悲鳴、ソ連兵の暴行事件があり、翌日女子は全員髪を刈り顔を汚している。その姿を見、敗者の悲哀を痛切に感じた。最近、残留孤児の中に新民の方の氏名があるのを見て、我々と別れてからの残留邦人の方の苦勞が偲ばれた。

九月十八日、八路军（現中国軍の母体）の列車に同乗、新民を後に奉天に向かう。

シベリア行き

満州の九月はもう冬の訪れた。半袖の夏衣のままで捕虜になり、新民で寒さしのぎに南京袋等を纏い、奉天北稜に集合した我々は、まず冬物の支給を受けほつとする。幸いなことに被服倉庫が近くにあって、夜忍び込んで勝手に良いものを

持ち出す。

ここで他の部隊と合流、千五百人程度の梯団に編成され、目的地も知らされず奉天駅に向かう。

私は未だ体力が回復していなかったので、雑囊に身の回りの物少しと握り飯を詰め、みんなの後をトポトポと停車場に向かう。奉天出発は九月下旬だった。

銃を持ったロスケ（シベリアの酷寒の中で、苦役のために死んだ多くの戦友のことを思えば、あえてロスケの名詞を使用する）の「トウキョウ、ダモイ、ブストリ」（東京へ帰れる、早く早く）、この言葉にその後何度騙されたことか。貨車には相当の人数詰め込まれたが、満州北上中は比較的警戒も緩く、一駅行っただけは停まり、また進むといった状態で、行き当たりばったりの貨車輸送だった。停まるところからか満人が、饅頭、揚げ菓子、卵、豚肉の腸詰等を持って来て我々の衣類、時計等と物々交換を迫るので、我々にとってありがたいことであった。

私は交換する物もなく、皆のお情けにより相伴にあずかり、こうした一カ月余りの輸送中に衰弱した体がある程度回復することができ、以後の厳しいシベリアの苦役に耐えることができた。

僅かに望みを抱いていた、ハルピンからウラジオストックに出て日本に帰る夢も消え、相変わらずのろろと北上、十月末、満州最北端の街黒河に着く。雪がちらつき辺りは白銀の世界。

シベリアに渡る前夜、輸送中に親しくなった同年配の他部隊の友と、毛布でテントを張り細々とした薪火で身を寄せ合って将来を語り合ったのを思い出すと、今でも夢のような気がする。

朝方、黒龍江に鉄舟を浮かべ上に板を並べた橋を渡り、ブラゴエンチェンスクにシベリアの第一歩を踏む。忘れもせぬ十一月一日。白一色。

「トウキョウ、ダモイ」貨車にぎゅうぎゅう詰めにされ、扉には鍵をかけられた。

小便は壁に穴をあけてあったのでできたが、大便は停車と同時に鍵のあくのを待ち飛び降り、恥

も外聞もなく尻をまくってしたものだ。夜疲れて眠り、朝起きると顔だけ出して、蛇が絡まったような状態になっており、実に苦しい旅だった。

満州のときと違って走り出すといつ停まるか分からず、停車して、列車の真ん中にある食堂車まで食事を受け取りに行く、その一日二食の食事が待ち遠しいことだった。

東か西か、どちらに走っているのか、一途の望みはウラジオストックで、「ボオーボオー」汽笛が聞こえる。海が見える。「ウラジオストックに着いたぞ」の叫び。しかし駅に停まってみればイルクーツクの駅、海はバイカル湖であった。完全に帰国の夢が断たれる。さらにシベリア鉄道を西へ、ようやくクラスノヤルスクに着き、ここでシベリア鉄道と別れ、さらに今度は南下する。そしてプラットホームもない一寒村カピョールでようやく汽車の旅に別れを告げる。

途中で別れた隊もあり、当初の半分の七百五十人が下車、トラックで順次次の宿泊地ギードロに

立って行く。この小さな街ギードロは、後日私の作業に従事した所でもある。この宿泊したときは、シベリアでの唯一楽しいひとときを送った夜であった。

六、七人ずつ民家に分宿したが、私の泊まった家では、乏しい食料の中からパンや馬鈴薯パレイシヨを焼き食べさせてくれ、三人の娘さんも加わり、夜遅くまで身振り手振りで日本の家族のことなど語り、娘さんの歌うロシア民謡に合わせ慣れないダンスに興じ、本当に楽しい一夜であった。

翌朝、部落の人たちが総出で、馬鈴薯のゆでたのを一つずつ我々に手渡してくれたその温かい心は、たった一つの馬鈴薯であったが終生忘れられない。「スパシーボ、スパシーボ」(ありがとう、ありがとう)を繰り返し、手を振りながら別れた。

慣れない雪道を一列になって、自動小銃を肩にかけたロスケに引率されて行軍する。昼間のうちはまだしも、夜になっても歩き続ける。途中、小

休止にたまらず雪の上に寝転がりウトウトとする。スーと引き込まれるその気持ちの良さ、何か声が微かに聞こえてくる、だんだん大きくなる。

「早川、眠ってはいかん、早川、起きろ」頬を叩いている島田班長の声で目を覚ます。凍死するときの気持ちは、こんなに良いものであろうか。また起きて歩く。明かりが見えてくる。しかし通り過ぎる。黙々と歩く。後で知ったが、約百キロの雪道をたどる難行軍。後に地獄が待っていることも知らず、トランスワール収容所に到着、ホッとする。

トランスワール収容所

しかしホッとする暇もない。割り当てられた雪に埋まった宿舎の入り口を探して掘り出さなければならぬ。やっと雪をかき分け入って見れば、どこから入ったのか部屋の中は雪が半分くらい積もっている。やっと片付けたが薪もない。食事もない。いつのことか、その日はついになく日が暮れる。

寒くて仕方がない。やむを得ず木製の寝台を叩き壊してペーチカにくべ暖をとり寒さを凌ぐ。

翌日ロスケの将校に分かり、物凄く叱られた。

ようやく黒パン百グラム（黒パンは目方があるので、現在の食パンの薄めの切れを半分弱）とスープ（キャベツの漬物を湯に入れたもの）が茶碗二杯程度が朝夕二食配給になるようになった。

一部屋に十人ぐらい割り当てられた。雪で埋まった宿舎は薄暗く、夜は二重扉の外扉を不寝番を立てて絶えず除雪しないと出られなくなり、外から他の部屋の者に掘り出してもらうこともあった。

ぼつぼつ作業開始の話も始める。十二月十日「使役集合」の声がかかったので志願した。

このとき、坂下町の出身で三菱航空機と一緒に入所、軍隊も一緒、以来同年兵として行動を共にしてきた原新一郎君が何となく寂しそうに、私に食べる物と交換できたらとバンドを渡して頼まれたが、これが最後の見納めになるうとは知る由も

なく、使役の声に応じたのが彼との生死を分けた。

恵那地方出身の同年兵六人がトランスワールに来て、丸山君と私が使役に出て、残った四人のうち三カ月余りの間に、原君、中津川の田口欽一君、中の方の森甲子男の三君を失う。

残った笠置の樋田君が、余りに犠牲者が出るので三月末閉鎖することになり、我々のギードロにヨボヨボになって移ってきた。樋田君から三君の死を知らされる。

酷寒の中、金山の厳しいノルマに加え、食料不足による栄養失調により多くの死亡者を出す。その話の余りの悲惨さに声もなく、ただ己の運の強さに感謝した。三カ月の間にトランスワールでの死者二百人余り、まさにその悲劇の大きかったことを知ることができる。この惨状については、一九九二年、有志によって発刊された「トランスワール小史」代表、軍医大尉榊原 詮氏の序文を抜粋することにする。

『私たち七百五十人はシベリア鉄道の小駅に降ろされ、約百キロにも及ぶ道を、難行苦行の末、十一月末、トランスワール金鉱収容所に入れられたのである。悲劇はここで翌年三月までの間に繰り広げられた。金鉱山の労働環境は、酷寒と、粗悪な食料に加えて苛酷なノルマ制によって、劣悪を極めた。

たちまち栄養失調は全員に波及し、やがて死者が続出する最悪の事態となった。生きている者も、自己の命の灯火を辛うじて保持し得る程度にまで困憊し、仲間を埋葬する作業員にも事欠き、死者は虚しく廃屋に放置されるに至った。

二十一年三月上旬に至り、ようやく事態の深刻さに気づいたソ連上層部は、全作業の中止を指令したが、時すでに遅く、疲れ衰えた仲間たちの死亡はその後も続いた。

そしてソ連側は死者名簿等の一切の記録をことごとく没収したのである。その後ソ連は長年にわたって、抑留死者の数を明確にすることはな

かった。

平成三年四月、ようやくゴルバチョフ名簿が公表され、それによって私たちの地獄谷の惨状の片鱗が改めて確認された』

トランスワール小史に投稿されたいずれの記録も、真実に溢れ、鬼哭嗷々として私たちの心に迫る。かつて寢食を共にした二百有余の仲間たちは、自分を若くして白骨とならなかつた理由を、永遠の沈黙の中に閉ざしている。

生き残った私たちは、彼らの憾みを後世に伝え、彼らの悲しみを語らねばならぬ。それが凍土に果てた戦友の冥福を祈る唯一の願と信ずるものである。

ギードロでの伐採作業

ギードロ、先にも述べた楽しい思い出の街である。しかし、作業に入ってから苦難の街でもあった。

約六十人、金子、高山両将校の指揮のもと、ト

ランスワールから移った我々は、まず街の中央にある広場の中にある公会堂に立ち寄り、併設の入浴場に隣接する滅菌室に衣服を脱ぎ一まとめにして天井の鉄棒にぶら下げて隣の浴室に入った。ロシアではシラミの発生が多く、シラミによる発疹チフスの予防のために移動のたびか、月何度かの入浴のとき、酷寒の最中でも素っ裸になりやられた。また何度か陰毛と腋毛を剃らされたのには閉口した。浴室は洗い場に腰掛け用に階段が三、四段あり、後ろの壁に窓が切つてある。最初に前のカラシから湯を汲み窓の中へ投げ込むと（石を並べ下から熱してあつたようだ）湯気が吹き出す。部屋の中に湯気が立ち込め適当に体が温まるまで繰り返し、汗が出てきたら垢をこすり湯で流す。滅菌の済んだ被服は最初、革類を一緒に出したら縮んでしまつて失敗した者が多くあつたのも思い出の一つだ。

作業宿舎は街から一里ぐらい山の中に入った所にあり、日曜の休みごとに通うのは億劫であつ

た。宿舎は三十センチ程度の丸太を重なり合う部分だけ平にして積み重ね、合間に水草を詰め壁を造り石灰を塗って白く化粧してあった。幅十メートル、長さ三十メートルくらいだったと思う。真ん中に出入り口が外に突き出ている、扉は二重になっていた。両奥の壁にペーチカが取り付けてあり、両方の壁は二段の棚になっており、我々のベッドになっていた。

薪物は豊富、電灯もあり室内は真冬でもシャツ一枚で過ごすことができ、トランスワールのことを思えばまさに極楽であった。入所当時はロスケの男女の指導者も一緒に寝起きしていたが、彼らは着たきりのまま寝ていた。その後宿舎が増築され移っていった。

二人一組に二メートルくらいのピラー（鋸）と、七十センチくらいのタポール（斧）を各自に一丁ずつ渡された。五、六組にロスケの指導者一人がつき、作業をした。五、六十センチ以上の（エゾ松の種類であろうか）太さの木が鬱蒼と茂

る原生林であった。

まず倒す方向にタポールで受け口を掘る。続いてピラーを双方お互いに呼吸を合わせて引き、切り倒す。タポールで枝を払いピラーで一メートルの長さに切って行く。次に一玉ずつ起こして両方からタポールを打ち込むと難なく割れ、適当の大きくなるまで割って、これを夕方、高さ一メートル、横三メートルに積むとその日のノルマ達成であった。

積み方も工夫し、透き間を少しでも多く開け立積がふえるように積み、ロスケに「ヤボンスキー（日本人）はずるい、トウキョウが見える」と、叱るのか、からかうのか、よく言われたものだ。

四メートルだと夕食が二食分支給された。しかしこれも体力のある最初のうちだけで、次第に体力が落ち困難になった。ノルマが達成できないと夕食がもらえなかったりで、体力の強弱により、強い者は弱い者と組むことを嫌うようになり、弱者は益々衰弱してゆく、このような悪循環が避け

られなくなってきた。ノルマ達成ができぬ者たちがふえてきた。

タポールで受け口を掘るのにも力がないので跳ね返され、仕方がないのでそのままピラーで挽くと倒れる方向が決まらず隣の木に引っかかり、これを倒すのにまた一苦労しなければならぬ等、次第にノルマ達成が困難になってきた。女の指導者によく「ニエラポータ、ヨッポイマーチ」（仕事をせぬ人で悪いやつだ）と悪口を言われたり突き倒されて、思わず斧に手をかけたこともあった。

そんな中でも男の年寄りの指導者で、「仕方がない、明日一緒に積め」と、ノルマの券を手渡していたわってくれた人たちもいたのが思い出される。

食事は百グラムの黒パンと燕麦のお粥がかいしゃし一杯、キャベツの漬物をスープにしたのが飯茶碗に一杯、それに親指と人差し指を丸めた程度の大きさの肉切れだけで、夜は寝るだけの理由

からか肉はなかった。なかなかたくさんのようだがとても腹を満たすには程遠く、昼食は飯盒に全部入れてそれに雪を加えて、焚き火で煮て量をふやし満腹感を得たものだ。

二十一年の正月は特別に休ましてくれたが、高山少尉の音頭で全員、故郷を偲び黙禱、健康に留意して全員無事日本に帰還できることを祈る。食事に特配はない、黒パンを餅に見立てて食べ、寝ながら空腹に耐え、ただ食べ物のみを考える。

人間、衣・食・住と生きていく上に大切な物を順番に並べているが、人間飢餓に堕ちると衣も住まいも顧みなくなる。まさに餓鬼道とはこのことであろう。

酷寒のシベリアで生きてゆく上に大切な毛糸の防寒セーター、靴下等をパンと交換する者も多かった。セーター一枚で黒パン三キロ、靴下一足で一キロ、物資の少ない民間人相手では案外容易なことであった。私もロスケの警備兵が布切れを足に巻いて靴下の代わりにしているのを見て真似して

みると案外温かく、二足あった靴下をパンと換えて食ってしまった。

ひどい話だが、倉庫に安置してあった死人のセーターがいつの間にか脱がされていたことさえあった。夜中に皆の寝静まったのを確かめ宿舎を出、警備兵に見つからぬよう注意しながら民家を訪れパンと交換し、後を楽しみに残して食べ、残りを雪を掘って隠し毎日食ったものだ。

結局は我々のパンの量が減っていくことが分かり、最初のうちは点呼のとき高山少尉から自覚するようにとの注意だけだったが、何度注意されてもやまぬので制裁もエスカレート、半死半生の制裁を加えるまでになり、その制裁は凄惨なものであった。私もパンと交換しようとしたときは決死の覚悟で、それからはもう二度とやるまいと思いつながらぬ、その後何回か交換した。

もう交換する物もなくなり、何かないかと探している、燕麦のお粥の焦げを炊事場の裏に捨ててあるのを見つければ、夜になって早速出かけ飯盒に

詰めていると、ロスケの警備兵に見つかる。しまったと観念したが、頬つぺたを手で叩く真似をしてニヤッと笑い、早く持って行けと手で合図してくれたときは一度に汗がふき出し、思わず警備兵に感謝した。

一月半ばごろ、ロスケの女軍医の身体検査がある。裸にされ聴診器を当てるのはお座なりで、尻の肉を摘まんて痩せて肉の少ない者は「ジストラファイ、ニエラボート」（病気だ、仕事はしなくてよい）と言われると、翌日から休養できた。

私のように痩せている者は検査のたびにジストラファイで、いつも一週間程度休養できたが、体質の肥満質の人たちは内臓疾患があっても休むことができず、いつもこぼしていた。

だんだんと作業に出るのが辛くなり、作業場までの道中、一歩一歩を進めるのが辛くちよつとこのことで転び、起き上がるにもなかなか立てず、戦友に助けられたのもこのころである。

夕食後にはシャツのシラミを潰すのも日課のう

ちである。朝起きると馬鹿にもぞもぞとシラミが多い。隣の戦友を起こしても起きない。よく見ると死んでいた。シラミも死体には気持ちが悪いか、両方に移動したとみえる。この人がギードロでの最初の死者であった。

ちょうど私は休養中であつたので五、六人の者と一緒に指名され昼間穴を掘つたが、凍つていてツルハシとスコップで五十センチ程度掘るのがやっとであつた。

点呼後ロスケの指示で、倉庫にあつた死体を裸にし担ぎ出したが凍つて硬直しており、四人で担いで行くにはちょうど良かったが、家族には見せられない始末である。

二月末から三月になると、三カ月前にトランスワールで別れた戦友たちが見るも無残な、正視にたえられない姿で送られて来た。中には馬糧に乗せられ意識不明で送られて来た者もあり、我が中隊の戸田班長もその一人で、私がギードロを去るときも意識は回復していなかった。収容所はまる

で病院になった。そうこうするうちに三月末、我々のような動けるが作業のできない者たちは、押し出されるようにこの地区最大の収容所アバカンへ移ることになりギードロを後にする。

アバカン収容所

日本でいえば県庁所在地に当たるところで、蒙古北方に地図にも載っており、炭鉱に二千人程度の捕虜が働いていた。

この収容所は食事の量は多く、燕麦のお粥に肉の入った野菜スープ、病人には白パン、時にはカップ一杯程度の白米のご飯も出たが、糲が多く混じっていたので一粒一粒ずつ歯で剥いては吐き出して大切に味わつたものだ。

一月ほど休養すると体力も回復し、軽い作業に出ることになり、浴場勤務を志願する。

この頃から「日本新聞」が週一回配られるようになり、併せて日本人による思想教育が行われるようになった。このことについては、軍国主義か

ら抑圧を解放した民主化運動と評価する面もあるが、マルクス・レーニン主義を押し付け、帰国したら共産党への入党、併せてスターリン崇拜を強要する連中の行為は、同じ日本人として感情的に賛同できなかった。またシベリアへ来て以来の多くの戦友の悲惨な最期を思うと絶対共鳴できなかった。共産主義の本案ソ連は口に民主を唱えながら、一党独裁に反対した者はシベリア流刑、はなはだしきは処刑抹殺と独裁である。

異国の地で亡くなった多くの戦友を厳寒の荒野に一糸も纏わせず葬らせ、ひそかに採った遺髪さえ取り上げてしまった非人道的思想。「平和」の名のもとに周辺の弱小国家を自国の意のままに従わせる大国主義。我が国に対して日ソ不可侵条約を一方的に破棄し、北方領土を占領し、我が国固有の領土を返還しない膨張主義、これらはすべて共産主義国家ソ連の本質ではなからうか。

「日本新聞」は、活字に飢えた私たちが隅から隅まで読み尽くした後は、マホルカ（オガコ）のよ

うなばら煙草）の巻紙として貴重だった。幅五センチ、横十センチの薄片に破いてその上にマホルカを乗せ巻いて、唾をつけ両端を振れば巻きタバコのでき上がり。初めのうちは非常に辛かったが慣れると旨くなった。ギードロ時代は配給もなくロスケに煙草と新聞紙をねだって吸ったが、ないときはおが屑や松葉等、替わりに吸ったりした。これも飢餓を癒すための方法でもあった。

シベリア鉄道帰路の旅

六月初旬、突然ギードロ組が集められ「ダモイ」を申し渡され、アバカン駅からギードロから直接来た者たちと合流して出発する。貨車一台の中に両側を二段にし藁布団を敷き二十八人乗りで、来るときとは待遇は雲泥の差であった。

列車は北上しシベリア本線に入り、東へ東へとひた走る。春を迎え一斉に萌え立つシベリアの広野は無限のように続く。カキツバタの紫のジュウタンを敷き詰めたような湿原。広大なまだ萌え立

たぬままの草原の彼方に雲のように見える羊の群れ。

幾日走ったであろうか、突然草原の中に近代的な街が現われる。

我々の列車は引込線の中に入り停車。付近で作業している日本兵が手を振っている。ハバロフスクだ。下車した我々は、何千人分も処理できるような滅菌室の前で例により裸になって、被服を吊るし入浴を済ます。再び乗車、東へ向かう、半月に及ぶシベリア鉄道の旅。この間、我々とは反対に西に向かう列車の扉には鍵がかけられ、窓からは日本兵の顔が見えた。長い列車に何回か出会う。まだまだなかなか帰還できそうもない人たちに同情しながら終着駅ナホトカに着き、長かったシベリア鉄道の旅を終える。祖国に続く海、「日本に帰れる」夢は膨らむ。下車してから乗船を待つ数日のいかに長かったことか。

「トウキョウ、ダモイ」ロスケの乗船を促す声に思わず「スパシーボ、スパシーボ」と感謝の言

葉を述べながら乗船する。ポオーと汽笛の音、ゆっくり船は岸壁を離れて行く。だんだんと遠ざかって行く、幾多苦難の多かったシベリアの街や山、万感を胸に目の潤むのをこらえ何度も何度も手を振りながら別れを告げる。

「ロスケ」私はこう何度もソ連の人たちを呼んだが、下級階級の人たちは純朴で、我々日本人に親愛と同情を持ってくれた人々が多かった事実を、シベリアを去るに当たり記す。

追記

トランスワール、ギードロ両收容所について、一九九一年四月来日のゴルバチョフ・ソ連大統領持参の死亡者名簿によると、第三十三地区（アバカン）第五分所に属し、死亡者百六十四人となっているが、名簿発表後、関係の方々の調査検討により、名簿漏れとギードロでの死亡者を加えると推定四十人程度で、合計二百人以上と推定される。私が最後の收容所はアバカン地区チュエルナゴ

ルスク収容所とのこと。

北朝鮮 古茂山収容所（清津北方）

着いた。「下船」の声も待ち遠しく上陸する。

どうも街の様子がおかしい、長髪の人たちの話す言葉は朝鮮語だ。頭の中は真っ白になる。

「ダワイ、ダワイ」（早く早く）、ロスケの声に我に返りトボトボ後に続く。古茂山収容所に着いた。この間の行程は全然記憶にない。

河原のような広場の所々に、十畳ほどの広さで深さ六、七十センチほどの穴が掘ってあり、側面は石が積んであった。十人くらいに分かれ寝るように言われ、仕方なくその日は持ってきた毛布を共同で使い就寝する。

六月下旬の昼間の北朝鮮は日照が強い。翌日、全員で屋根を造ることになり、幸い付近に柳の木が生えており、手ごろな大きさを骨組みにできるのを選んで、刃物を持たぬ我々にとっては難儀なことであったが、何とか皆の努力で屋根の形に

なり、柳の葉を被せて日よけができた。

三度の食事は連日トウモロコシに塩魚の友煮で、胃の弱い私は下痢に悩まされるようになる。

おまけにビタミンの不足か鳥目になってしまう。

夜は視界が狭くなりはっきり見えなくなる。それに加え膝と足の裏が痛くて、杖をつけて用を足すような状態になった。私の他にも多くの人たちに見られた。ある日、露天に囲いもなく長く掘ってある壕のような便所で小便をしていると、突然向かい側から「あんたは岐阜県の出身ではないか」と。私は見覚えのある顔を思い出したが、とっさのことで名前が思い出せない。「付知の方ですか」と問い返すと、「俺は九区の片田正弘です、あんたは芳美さんでしょう」とお互いに確認した。正弘さんは私より状態が悪く、戦友の介添えがなければ用を足せぬ状態であった。以後何かと訪ねて昔話などして慰めた。

梅雨に入り柳の葉の屋根では雨漏りで湿気に悩まされ、仕方なく毛布を屋根に被せる。湿気に加

え食事の悪さのためか赤痢が発生、死者が出始めた。

こんな状態ではせつかくシベリアから生き延びた命、何とかせねばと考え、まず下痢を治すことが一番とトウモロコシを一個一個皮と芯を取り除き、搗いてダンゴにして焼いて毎日食べた。これに付近の食べられる草を戦友に習い、箒草、酔っ払い草等食べられる草は何でも茹でて、塩魚の残り汁をかけて食った。また竹を焼き炭にし、粉にして飲んだ。

そのうちにこれらの効果があつたのか足の痛みも取れ、夜見えなかつた鳥目も治ってしまった。元氣になってから死者の埋葬使役に出て十六人も埋葬したが、ホツとする間もなく、後何人かの追加埋葬をしたことがあつた。

七月初め、平壤（ピョンヤン）に移動の命令が出て、正弘さんに別れの挨拶に行くと、涙を流しながら別れを惜しまれた。そのときの正弘さんの姿が今でも思い出される。復員後しばらくして、

この地で亡くなられたことを知る。ご冥福を心よりお祈りする次第です。

このごろフツと思うことがある。太平洋戦争による戦没者の遺骨収集、現地慰霊祭等が、南方の島々をはじめ各地で行われているが、この地ではその消息を私は未だ知らない。北朝鮮とは国交がないのが原因であろうが、一日も早く慰霊祭と遺骨を故郷に迎えるよう祈念する次第です。

汽車で朝鮮半島を横断、平壤に向かう。

平壤三合里収容所

平壤駅で下車、直ちにトラックで収容所に向かう。途中、子供を連れた日本人婦女子の一团に出会う。持っていたコウリヤン等の食料を車の上から投げ、無事日本に到着できるよう手を振って見送る。収容所の前で白衣の看護婦さんが出て我々を迎え、歩行困難な者たちを宿舎まで背負って連れて行ってくださった。このとき久しぶりに出会った日本女性は本当に美しく優しいと感じ、背

負われていく戦友が羨ましく思われた。

収容所は陸軍病院を中心に、広い草原の丸い緩やかな丘の上に、周囲を鉄条網で張りめぐらした中に点々と建っていた。給与も医療も良く体力の回復も早く、いつしか暇を持て余すようになる。

ぼつぼつ退屈の虫も起きてくる。平壤の街へロスキの将校の家に使役に行った連中の「うまいものや煙草にもありつける」話を聞くにつれ、我も今度こそと「使役集合」の声を待つ。

着いてみれば新義州であった。鴨緑江を挟み対岸は満州の安東、さすがに自分の二年足らずの行程を振り返って「使役集合」、真っ先に出ては思惑違ひ。

しかし、このことでは運が良く生死を分けた事実。シベリアでトランスワールの地獄谷からはみ出られたこと。また、我々の後に残った三合里の人たちが、コレラがはやり毎日多くの死者を出した事実等。

三合里で当時炊事係をしていた静岡の同年兵佐

野君の最近の便りで詳細を知ることができ、生死の境の運不運の怖さを強く感じた。「毎日死者が五十人くらいずつ出ました。毎朝戦友が運ばれて行くのを見たときほど、恐ろしいと思ったことはありませんでした。余りのすごさに炊事場を捨てて、収容所の外に天幕を張ってカマドを築き炊事をし、食事どきに鉄条網の所へ運ぶと、それを中の当番が取りに来るといふ毎日でした」。話を聞き、自分の運の良さを知った。

新義州の思い出

我々は着くと同時に、飛行場の隅に宿舎の建設にかかる。

直径十メートルほどの円形の天幕を張り、天幕に沿って身長に合わせて藁を敷き完成。蒙古の包（パオ）を想像する。まさか十一月末までここにいるとは思ってもよらなかった。寒さが厳しくなるにつれストーブも据え、室内はそれぞれの知恵で順次整備され、暮らして見ればなかなか快適で

あった。一幕舎十人程度居住し、炊事室共に一幕舎だったと思う。

隊長は恵那駅前通で復員後食堂を経営しておられた岡庭曹長で、以下四、五十人だった。出身部隊はバラバラで、私は同部隊の者はなく一人だった。

作業は、爆弾の黄色火薬を抜いて袋に詰めたものを岩山に仕掛けて爆破、採取した採石を滑走路に敷いて引きならす単調な作業だった。ただ、日よけのない場所で直射日光を受けての真夏の作業はつらく、我々は暑さを凌ぐために上半身裸で半ズボン、それにスコップを持ってのその姿は、今から思えばさぞ滑稽だったろう。

食事は塩のよく効いた鯖、サンマなどがその都度二本三本と付き食べ切れないので、腹を抜き天幕の上に干しておき、夜将棋などしながら腹が空くと食べたものだが、塩分のとり過ぎか顔のむくむ者が出てきた。そのうちに未だ新義州の街で帰還のめどの立たない残留邦人会の人たちと、ロス

ケの許可で交流できるようになり、我々の魚と味噌、野菜等を交換できるようになり、食事が楽しくなってきた。これも八月末、邦人の引揚げが決まり、なくなった。帰還に当たり、我々の消息をこの人たちに手紙で託し、無事日本に帰還できるよう祈りながら見送る。復員後手紙は家族に届いており、入隊以来ただ一度の無事の便りに、父母はじめ家族親戚が安堵したようだ。

ある夜突然対岸の安東で、共産軍（現中国政府）と蒋介石軍との砲撃戦が始まる。我々は天幕の裾を上げ「対岸の火事」と興味を持って眺めていたが、結果は共産軍が負けて、同じ共産党治世下の北朝鮮に鴨緑江を渡り逃げてきた。これに影響を受けたのか、「蒋介石は日本人をどんどん日本に帰還させているが、朝鮮にいて未だシベリアに行ったことがない者はシベリアに送られるらしい」と誰言うもなく囁かれ始め、朝鮮にいて未だシベリアに行ったことのない連中がこれを信じ、そのうち四人が皆の制止を振り切り夜に紛れ収容

所を出て行った。我々は一步でも遠くへ行けるように毎日の点呼をごまかし続け、「知らぬ、知らぬ」で最後まで通し四人の無事を祈った。

十一月に入ると気温は氷点下に下がる。雪も積もり作業もできなくなり、漠然と日を過ごしていると十一月末、平壤への帰還命令が出る。平壤帰還後十二月に入り「トウキョウ、ダモイ」日本へ帰すから汽車に乗れと命令が出た。今までのこともあり余り期待もせず、言われるままに汽車に乗り平壤を後にする。

復員（興南港から）

平壤から興南港で乗船するまでの記憶が余りないが、日本兵の中の民主運動家による共産党思想教育があった。しかし、シベリアで亡くなった多くの戦友のことを思えば腹の立つことばかりで、反対とか批判をすれば帰還できなくなると、お互い戒め合いながら黙々と聞き流す。

いよいよ乗船間際にこれらの人たちの音頭取り

で「お世話になったスターリン大元帥のために万歳をする、皆唱和せよ、万歳」「万歳、万歳、万歳」全く馬鹿げたことだが、どこにスパイがいるか分からないので仕方なく唱和する。

十二月三十一日大晦日の夜、乗船が始まる。暗闇の中一列に並びそろそろと前に進む。私は最後尾の方でイライラとしていると、最後尾の者たちは、今まで何度もロスケに「ダモイ」で騙されてきたので、日本の船に乗るまでは安心できない、早く知りたいと。後尾の者の心情は皆同じだ、誰かが「前に通伝（軍隊用語、前に送れ）、日本の船か」ずっと順に送られて行く。しばらくすると「後に通伝、日本の船だ、日の丸が見えるぞ」送って来る声が、暗闇の中をだんだんはっきりと戻ってくる。乗船したが日本の船か、本当に信じるまでにはまだ時間がかかった。

昭和二十二年元旦、船上からの日の出は本当に美しかった。

帰りの玄界灘は行きとは違い波静かで、船は

ゆつくりと対馬海峡を横切る。一月七日、佐世保港に接岸する。上陸時に米軍に頭から全身真っ白くなるまでDDTをかけられたのが強く記憶に残っている。厚生省の係官の調査で四、五日過ぐす。

ここでギードロで別れて以来の丸山、樋田の両君に再会し、お互いの無事を祝福した。

帰郷してから、トランスワールで亡くなった同郷の同年兵、原新一、田口欽一、森甲子男三君のご遺族宅訪問の際の報告の打ち合わせをする。

一月十四日夜、付知の家に復員する。

病気のためシベリアに別行動の小木曾清、度会高明の両君も我々より遅れたが無事復員、中国に残った多村、市川の両君、五八飛大の福岡町苗木の同年兵の諸君も全員、我々より早く復員していた。

復員をしてから

帰宅後数日経ってから樋田君の笠置の実家に丸

山君と三人集まり、中野方の森君のご遺族宅から、中津川の田口君、坂下町の原君と順次、死亡報告をする。未だ公報が入っていなかったたので、ご両親はじめご家族の方に話をするのがつらかった。

復員後、五七飛大、五八飛大合同で同年兵会を開いて、中国やシベリアでの思い出を語り合ってきたが、復員以来五十余年、その間、佐々木君（旧姓度会）、続いて樋田、早川鉄雄君が不帰の客となる。我が五七飛行場大隊戦友会は、支那事変初期に編成以来の歴戦の部隊とかで、全国に跨がる出身地のため、毎年異なった地区で輪番に開かれていた。私は第十回広島大会より参加以来、京都、大阪、岡山、静岡の大会に参加。昭和六十年には恵那の同年兵と共に恵那峡国際ホテルで主宰した。

我々同年兵が最年少者、皆それぞれ高齢者のため、平成七年京都をもって最後になった。以後、地域ごとに毎年寄り集まっている。

平成四年、シベリア募参の話があり、最初六月のことで参加予定したが九月に延期になり、私は茄子収穫の最盛期で長期の留守ができず、不参加のやむなきに至る。

この後、シベリア抑留誌「トランスワール小史」が編集発行された。私も会員として応分の寄金をする。小史に寄稿された方々は下士官、将校で、年月の経過とともに、苦しみが懐かしい追憶となってしまう、自分たちの味わった地獄の苦しみが薄められているような気がする。私も一兵士の経験した苦難のシベリア抑留と気負って見たが、やはり懐かしさが増えてしまった。小史発行後、突然静岡県黒柳さんからお手紙をいただき「小史に早川さんの名前を発見して、シベリア時代に焼き鳥のうまい話を聞いたことを思い出して、ぜひ食べてみたい」との要旨であった。

その後、小史編集責任者の神戸の佐藤さんと同行して当地方に見えたので、恵那の丸山君の案内で恵那山荘で会食、鳥屋で焼いて食う小鳥の味の

うまい話もしたが、残念なことに時期も悪く、またの機会を約束する。黒柳さんとは部隊が違っていたが同年配で、飢餓の中のシベリアでは食う話が一番記憶に残っていて、お互い忘れられなかった。

振り返ってみるに、私の追憶の中に一番書かれているのは食えることが多かったように思う。

あとがき

古希の同級会を以前に済まし、平成六年に書き始めて足掛け三年、未だ記憶の残っているうちに書き始める。暖かくなると茄子栽培等の百姓仕事で、冬だけだったが、とにかくよく仕上げることができた。何かもつと書くことがある、焦ってその都度考えるが、五十余年の歳月を経た現在、なかなか思い出せない、思い出してもうまく表現できないもどかしさ、本当に何をやめようと思ったか、その都度休む、また始めるの繰り返しだった。記憶の曖昧さも否定できない。ギード

口の収容所には丸山君も一緒に入った組だと言うが、最初からいる俺は丸山君の覚えは全然ない。ギードロの生活が余りに苦しくて忘れてしまったのか。一番親しい同年兵との生活も忘れてしまっている。まだまだ初年兵教育隊時代のこと、手を挙げて捕虜になったとき、シベリアあるいは北朝鮮での捕虜生活等、もっともっと書きたいことがあるような気がするが、つたない筆力ではこの辺が限度。

平成八年、榊原軍医さんを囲む五七飛大の集いに、拙書を出席の皆さんにお配りしたところ、後日皆様よりご感想をいただき、またご指摘やら貴重な資料をも送っていただき、これらを参考にして違っている部分の訂正、思うように表現できなかった箇所の見直しを補稿しました。私の八十年近くの人生のうち、僅か二年の軍隊時代。

若い^{ほとばし}逆る情熱を国のためと喜んで死地に赴いた当時の若者たち。平和の今日、理解する人たちの少ないのが悲しい。私も当時純粋に国を愛し、喜

んで兵役に参加したことに悔いはない。

しかし、それも敗戦によりその意義を失う。

「何のために、何をしたか」

八十歳を目前にし、これを模索するとき、素漠たる気持ちを禁じ得ない。

「日本新聞」、支那大陸の地図等貴重な資料を送って下さった福井の西さん、いろいろとご助言いただきました長野の長谷川さん、和歌山の野下さんをはじめ諸先輩の方々に厚くお礼申し上げます。

最後に、シベリアの雪の荒野で、望郷の念にかられながら亡くなられた戦友の冥福を祈り、擲筆する。

【執筆者の紹介】

軍歴

昭和十九年十二月一日 浜松中部飛行第九七部

隊、現役徴集として入隊

〃 二十年一月二十日 中国湖北省白螺蟻駐屯、

第六〇飛行場大隊にて、
初年兵教育

同年 五月中旬

湖南省湘潭駐屯、第五七
飛行場大隊補給中隊へ配
属

属

同年 七月中旬

旧満州遼寧省新立屯へ部
隊と共に移駐

同年 八月十九日

新民駅にてソ連軍と遭
遇、捕虜となる

同年 十月初旬

奉天にて他部隊と共に千
五百人程度、梯団で出發

同年 十一月二日

ブラゴエシチェンスクに
入ソする。四九作業大隊

同年 十一月十八日

トランスワール收容所
到着、途中半数と別れ七

百五十人

同年 十二月十日

ギードロへ伐採作業のた
め、約六十人と共に移転

従事する

昭和二十一年四月下旬

アバカン地区チエルナゴ
ルスク收容所へ移転

同年 六月下旬

同收容所出發、ナホトカ
港出港、北朝鮮古茂山収

容所へ

同年 七月初旬

平壤郊外三合里收容所へ
移転

同年 七月下旬

新義州へソ連軍飛行場の
復旧作業に出發

同年 十一月下旬

平壤へ帰還

同年 十二月三十一日

興南港出港

昭和二十二年一月七日

佐世保港入港、復員

職。

昭和二十二年に復員後、体力の回復とともに地

元の付知土建株式会社に就職、六十歳で定年退
職。

以後、農協の役員を十年勤め、その他老人会の
役員等を歴任される。
現在は子供たちは成人独立、今は奥さんと二人

で五反ほどの田畑を守っておられる。

畑に栽培されている茄子が順調で好成绩のよう
です。

抑留当時の悪夢を思うとき、現在が夢のように
幸福ですと淡々と語る日焼けした顔が印象的でし
た。

(岐阜県 鈴木 善三)

思い出の記

静岡県 望月 貞

昭和十九(一九四四)年十一月十日応召。三十
歳。妻、三児を残して、静岡県内丙種合格者、愛
知県内丙種合格者、年齢三十歳前後ばかりと、大
分県内、甲、乙、第二乙種、十九歳〜二十歳の若
者との混成。満州国海拉爾ハイラルの空き兵舎に満州歩兵
第二五五連隊を創設、通信中隊に編入。二個班で
約四十人前後。各班に上等兵一人宛、指導に当た

る。班内での簡単なる身体検査を行う。丙種の者
は目耳の欠陥者、腕力、体力の虚弱者多く、「こ
れではとても」と、上等兵嘆く。上部からは「使
える兵隊」を急遽作成の方針指令ありとの由。指
導員不足はビンタ、ビンタで詰込み式。すべてが
「上官の命令は朕の命令と思え」であり、丙種な
がら一旦召集されたからには「七度死して君恩に
報いん」と勇んで出征した身、これも当然。ビン
タは日常茶飯事。「歩兵操典」「軍人勅諭」「戦陣
訓」の詰込み。銃剣術、匍匐前進、銃の手入れ、
通信機材の収納、馬の手入れ、水やり、飼葉や
り、それが済まねば食事もできない。次から次
へ、小便する間も惜しい。夜は一日の欠点注意、
説教、反省、対面ビンタでやっと寝られる。これ
が「使える兵隊」になる過程の一つ。

「義勇報国、使える兵隊」にいつしかなくて、
敵戦車の下へ爆雷を抱えて飛び込むことも何とも
ない気持ちになっていた。

二十年四月三日、第一期検閲、連隊長他将校等